



no. 01

座談会
わたしたちは人文社会科学部に
なにを期待するのか？

VISIONS

FACULTY OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES KOCHI UNIVERSITY

人文社会科学が「世の中を変えて行くのだ」という信念と自信をもって取り組んでいこう

平成28年度、新しくスタートする「人文社会科学部」。その新学部を知っていたら、ご意見やご助言もいただこうと、高知県の経済界、文化界、教育界、各々を代表する皆様、また、大学の同窓会、保護者の方にお集りいただきました。座談会の会場は高知市内の得月楼。1870（明治3）年創業で、宮尾登美子の小説の舞台としても有名。見事なお庭を愛でながら開催したことも功を奏したのか、新しい学部に対する熱い想いを存分に語っていただきました。いただいた皆様の期待に意を強くした私たちです。

すぐに役立つものはすぐに役立たなくなってしまう。 人文社会科学部の専門と教養教育は大事な学びになる。

吉尾： 本日はご多忙の中、お集りいただきありがとうございます。人文科学部は平成28年度、人文科学と社会科学を架橋する「人文社会科学部」として生まれ変わろうとしています。人文科学と社会科学を架橋する新たな人材の養成が私たちの新しいミッションです。率直に申しまして、着想の段階からここまで長い道のりでした。皆様には高知大学、大学一般に対して、新学部が求めるもの、学生が求めるもの、親が求めるもの、社会が求めるものなど、それぞれのお立場から忌憚のないご発言、また、この学

部への期待、要望などもお話いただければと思います。

中川： では皆様にはまず、それぞれのお立場から現代という時代について、お考えになっていることを一言お伝え頂きながら、自己紹介していただければと思います。

野中： 高知大学文理学部（人文科学部の前身）の7期生です。現在は高知大学の前身でもある「旧制高知高等学校」の残した文化的あるいは教育的な遺産を引き継いで行くという活動をしております。旧制高知高等学校はわずか26



吉尾 寛
高知大学人文科学部長



司会進行 中川 香代
高知大学人文科学部副学部長

年間でしたが、そこで行われた「知の教育」というものが大変参考になると思っています。私は基本的に大学教育のなかでは専門教育と同時に教養教育が非常に大事だと思います。人間が成長してだんだん年齢をとって行く過程で、「すぐに役立つものはすぐに役立たなくなってしまう」と感じています。長く役立つ専門と教養という面で人文科学部での学びは大事だと思っています。

合田： 私は昭和53年（1978年）、まだスタート間もない人文科学部に入学しました。卒業後、教師になりました。今日は学生を送り出す立場としてお話をさせていただきます。また、懐かしい母校のお話を伺えたらなと思っています。

吉澤： ひまわり乳業の吉澤です。土佐経済同友会で代表幹事をしております。私は「ララ音楽祭」、「土佐史談会」などの活動をしており、人が生きていく中で、文化、歴史といったものへの学びが無ければ人生は成り立たないだろうと思っています。いまはそういうところの知性、インテリジェンスみたいなものが世の中から欠落してきています。人文社会科学部には「知恵を授ける」という意味で重要な役割を担って頂けるとしています。

岡崎： 私ども高知商業高校では平成6年（1994年）から生徒会が主体となってラオスの交流活動として、「ラオス学校建設活動」を始めました。本校のような専門高校の生徒たちの大学への進学希望が多くなってきております。専門的なこと、国際活動を通じて実社会のことを学んだ子どもたちを大学側がどう受け止め、かつ伸ばしてくれるかについてお話を伺えればと思います。

渡部： 土佐山内家宝物資料館の渡部です。私は九州出身ですが、旧制高校の伝統と豊かさを持った大学に行きたいと思い、高知大学人文科学部を選びました。高知大学を卒業して別の大学の大学院にも進みましたが、いまから考えてみると、自分のいろんな物事を考える時に一番大きな影響をうけたのは高知大学における大らかな学部教育でした。当館では社会との「対話と連携」の一つとして高知大学と共同作業をしています。たとえば、歴史資料の調査を行ったり、いまの世の中は前に進もう進もうとしているけれど、そういう社会だけではなくて、振り返ることによって見える社会がある



渡部 淳氏
公益財団法人土佐山内記念財団
土佐山内家宝物資料館 館長
人文科学部文科学科 昭和60年卒業

ということ、振り返りが無くして先に進むのは大きな危険ではないかということなどを学生さんたちと話したりしています。様々な実践の場において、本当の学力や理論を身につけるためには、きちんとした座学をしていないと役に立たないと気づいて自ら勉強を始めるという学生も多いようです。

須賀： 人文科学部後援会会長の須賀と申します。娘2人が人文科学部でお世話になっております。高知県の職員として、地方創生の総合戦略づくりや産業振興計画に関わる中、少子高齢化の深刻さとそれを打破していくための取組の困難さを日々感じています。今日は、高知県のこれからをどうしていくのかというような視点と保護者の立場からコメントさせていただければと思います。

永野： 株式会社相愛の永野です。私自身、高知大学人文科学部経済学部の卒業です。弊社は地質調査を中心とした建設コンサルタント会社で、15年ほど前から地域計画に関わる仕事も行ってありますが、今年度にはいり、県内自治体の人口ビジョン総合政策にも関わらせていただいています。高知県は過疎化、高齢化が急激に進んでいて、止まらない流れの中でどうすればいいか、対応が求められていると感じています。



永野 敬典 氏
株式会社相愛 代表取締役社長
人文科学部経済学 平成10年卒業

高い山ができるためには基盤の強さが必要。 その基盤の強さは学問であり、方法論であり、裾野は知的好奇心の広がりだと思ふ。

中川： さらに企業が求める人間像というところで、吉澤さんいかがでしょうか。

吉澤： 企業としてどんな人材が必要かという。実はすぐに役立つ人間は要らないと考えています。いろいろな知識や知恵、人間としての大きさ、幅を持った人を求めています。そういう人でなければ、途中で潰れたり、うまく仕事ができないということになってしまいます。たとえば、経済学を勉強するためには当然のことながら歴史や政治を含めた学びが必要なので、いろんなことがつながって、いまこうなっているのだということをしっかり学んで社会に出てもらいたいと思っています。

永野： 私も同じようなことを感じています。面接に来られて困る方をご紹介しますと、先日、ある大学から、うちの地域系の部門に入りたいという学生が来て、面接で「過疎地域に入ってお手伝いをしている。あと何年かすれば消滅してしまいうような地域を建て直したい」と言いました。それでは、



吉澤 文治郎 氏
ひまわり乳業株式会社 代表取締役社長
土佐経済同友会 代表幹事

そのために具体的にどう勉強を自分でしているのかと聞いてみると、まったく行動が伴っていない。そういう学生をきちんと指導してもらえる学部があると企業としては有難いです。

中川： 学生や若い職員と接しておられる渡部さんはいかがですか。

渡部： いま、若い人たちを見ながら気づくのはパソコンの検索がうまくできない人が多くいます。機器は使えても、必要な情報を見つけ出すためのキーワードを選択できない。本質に近づくためのアプローチの仕方を経験していないために、結局はほんとうの情報さえ手に入れないという印象をうけます。そのためにやはり、何か核になるものを学生のうちに身につけないといけないと思います。高い山ができるためには強い基盤があって、裾野が広くなければなりません。基盤の強さというのは大学という学問であり、学問というのは方法論であり、裾野の部分は単なる知識ではなく、知的好奇心の広がりだと思っています。その好奇心と方法論が合致したところで初めて自分で考えるということができると思うのです。今回の改革は、大学の新しい挑戦の一つとして期待するところではありますけれど、そもそも別々の「科学」を「融合」することをあまりに急ぎ過ぎるともったいないことになるという危惧もあります。

中川： 皆さまのご意見のなかで学問と行動力、幅広い人間というようにお話が出たと思いますが、須賀さんはどのようにお考えですか。

須賀： これから求められるのは、既存のやり方や考え方に捉われず、例えば異質なものを同士を組み合わせるとか、異分野のものを結び付けることで新たな取組を生み出すというような柔軟な発想とそれを単なる机上のものにとせず、具現化していく力ではないかと感じています。そのためにも、新しい学部では、学生自身が自ら考え主体的に行動できる力を身につけられるような教育体制にしていなければならないと思います。

中川： 教育の面で高校生を育てられている合田さんは、これからの人間像をどのようにお考えでしょうか。

合田： 高校生は入学したところでは15歳のまだあだけない人たちが、3年間のなかで学びながら少しずつ成長していただきたいと思います。わたしたち教師は進学希望をかなえてやりたいと思っています。そして、できれば高校生のうちに知的な刺激を与えていきたいと考えています、そのことが大学に行

た時に好奇心や意欲として広がっていくのだと思います。

中川： 岡崎さんはラオスの活動で育てられた生徒さんを、大学がどんなふうに応援してほしいとお考えですか。

岡崎： いま、生徒たちは非常に慎重で、前に踏み出す力が非常に弱く感じています。私は国際活動で実際に生徒を現地へ連れて行き、できるだけ本物に出会わせようという心がけています。そして、そこで失敗から学び、勉強して何だろうかと気づき、実感していくことが大事でないかと考えています。大学においても失敗から学ぶと、学び続ける意欲をどうやって学生たちにつけるかということが、いまでも大事ではないかと思っています。



自分で学ぶ、そういう姿勢を作るのが大学。 大学での「あたらしい出会い」が人を育てる。

野中： 自分で学ぶ、そういう姿勢を作るのが大学でもあります。そういう勉強は教室だけでできるものでもない。一昨年、旧制高知高等学校の出身で小説家の三浦朱門さんが講演された時に「私の最大の幸運は南深寮の同じ部屋で阪田寛夫と出会ったことで、私の人生を決めた」とおっしゃっていました。話は飛躍しますが、外国の留学生と一緒に寮生活をすれば、お互いの国の文化が学べる。学生寮をもっとうまく活用していけばいいのではないかと思っています。

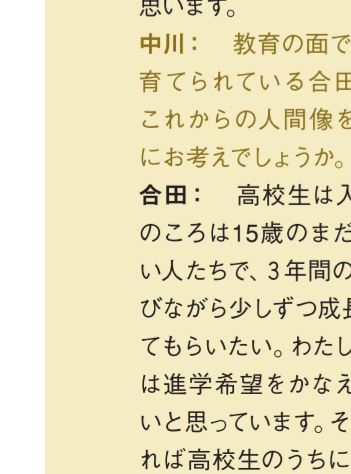
中川： 現在の人文科学部でもアジアを中心に留学生を多く受け入れていて「内からの国際化」をやっており、寮生活を送る留学生もいます。国際交流の場として活用できたら一層良いですね。

永野： 少し話がそれるかもしれませんが、学生が求めるものだけを与えることが本当にいいのかと考えてしまいます。例えていえば、ばたばたの雑巾やスポンジは吸い取らない。いま、情報を含め、いろいろのものを学生に与え過ぎて、学生自ら欲しない状態になっていると思います。そこをどうするか。新しい学部が考えていかなければならない課題でもあると感じています。

吉澤： ネット社会で育った人たちは、自分が見たいと思っている情報が見ない。しかもその情報が世の中のすべてだと勘違いしてしまう人が多いのではないのでしょうか。大学教



須賀 由香 氏
高知大学人文科学部後援会 会長
高知県職員



合田 敦子 氏
高知県立高知道手前高等学校 教諭
人文科学部文科学科 昭和57年卒業

育のなかで、いや、世の中はそうではないという部分を広く深く教育していただきたい。高知県は最先端で日本の課題に直面している。日本という国は中間がしっかりしていて初めて成り立つ国であると考えます。そういった意味で、高知大学には、日本の未来の社会の形を考える学問もしていただければ嬉しいですね。せっかくですから民族、文化と社会、それを一緒に考えるような研究をしてほしい。私はそのあたりに、日本の将来像の答えがありそうな気がします。

中川： 吉澤さんから良いきっかけをいただきましたので申し上げます、「社会科学コース」では、社会の制度を新しく設計したり、良くしたりするために経済学、経営学、法学の複眼的視点から考えてみようというコンセプトで教育を

しように報告してきます。高校生の段階から、どの学問領域で学びたいと明確に見えている生徒はほとんどいないのが実態です。大学に進んだその先にいろんな領域を見せていただいて、奥深い知見を養っていきける機会を生徒たちに与えて頂けるのはすごくありがたい。新しい学部には「新しい出会いのある大学」として大変期待をしています。

須賀： 保護者としては、人文科学と社会科学を一度に学ぶことができること、また、学年が上がる中で学びたいことが明確になったり変化してくると思います。それに柔軟に対応した科目選択ができることがメリットだと思います。先生方には上手に学生を誘導して頂きながら、学生の自発性を持った学びにつなげていただければと思

進めようとしています。他コースでは、歴史、文化、哲学を学ぶことができ、さらには制度を作り上げる際に直面するコミュニケーションの問題を扱っています。これらを複合して、社会の制度を考えていこうということを構想しています。

吉尾： そこに関連して言えば、現在の人文科学部の学生は、高知県出身が30%程度で、70%は高知県以外からやってきてくれています。その点に注目すれば、高知県のためだけではなく、高知で学んだことがそれぞれの地域でまた役に立つということになるのだと思います。

中川： では、ほかのみなさんにも、ぜひ人文社会科学部へのご期待も引き続きお話し頂きたいと思っています。岡崎さん、いかがですか。

岡崎： ひとつのことをやろうとしても横断的な学習が必要だと感じますので、この新しい学部で縦横的な学びができることはすばらしい。そのうえで、学生に学習の必然性を持ってもらうために、先生方の「しかけ」を期待しています。

合田： 同じ高校の教師として申し上げると、大学に進学した生徒たちは、あたらしいものとの出会いの中にいろんな楽しさを見出していて、夏休みなどに高校を訪ねてくれたときに嬉

ます。

野中： OBとして、そして年長のものとして、最後に申し上げます。いま、国は高等教育について、すぐに役立つことというのか、経済優先になってきているように思っています。幸せな社会を作るために人を育てて行くわけですが、世の中のしくみを変えることで、世の中は大きく変わるのではないのでしょうか。そのとき、人文社会科学の分野があって初めて、よい国になると思います。この

新しい学部の中からそういった知見を持った学生たちが自信を持って育ってほしいと思います。教育にあたる先生方も「人文社会科学が世の中を変えて行くのだ」という信念と自信をもって取り組んでいただけたら嬉しい。この度の組織改編に大きな期待をしています。

吉尾： 今日は皆さんのお声に大いに触発されました。大変ありがたいと思っています。新しい学部になりまして毎年、修正は続けていかなければいけませんので、今後とも人文社会科学部へご意見を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

中川： 本日は皆様のおかげをもちまして、このような活発な話し合いができました。ありがとうございました。



野中 朋之 氏
高知大学南深会
(文理学部、人文科学部、理学部同窓会) 参与
文理学部社会科学科 昭和34年卒業



岡崎 伸二 氏
高知市立高知商業高等学校 教頭